

トートロジーにおける評価的意味と譲歩性*

小野 瞳[†] 井原 駿[‡]

概要

トートロジー (tautologies, 恒真命題) に関する研究の多くは、特に名詞の同語反復からなる構文 (e.g., “*Music is music.*”) を意味論と語用論のどちらから (あるいはその両方から)、どのように説明するかという問題について議論してきた。本研究では、日本語における名詞句トートロジー (nominal tautologies) 「X₁ は X₂ だ」文の発話効果に焦点を当て、一部のトートロジー文から生じる特定の意味解釈は、その文が含む要素から構成的 (compositional) に導出されることを主張する。具体的には、「X₁ は X₂ だ」文における評価的意味に対して、日本語のトピック文 (topic sentences) の持つ潜在的な意味構造と *even* から表出される尺度の意味から説明を与えることを試みる。本研究は、名詞句トートロジーの意味構造に着目することで、トートロジーの解釈における構文間・言語間差異に新たな分析可能性を提示する。

1 はじめに

本研究では、名詞句の同語反復からなる名詞句トートロジー (nominal tautologies, e.g. *Music is music.*) の意味導出のメカニズムを分析する。従来のトートロジーに関する研究の多くは、意味論と語用論のどちらの立場から、どのように当該の現象を説明するかという問題について議論してきた。^{*1} しかしながら、トートロジーを形成する構文ごとの解釈の違いや、それらの構文が持つ言語的要素の意味貢献に着目した研究は限られており (cf. Okamoto 1993)、そのため、なぜ特定の形式が特定の発話効果をもたらすのかという問いについては未解明の状況にある。

本研究では、日本語における「X₁ は X₂ だ」文がもたらす評価的含み (evaluative implication) に着目し、その効果をトピック文の持つ潜在的な意味構造と、convert な *even* の持つ likelihood スケールの尺度前提から構成的に導出することを試みる。これにより、文形式上は共通基盤 (Common Ground, Stalnaker 1978) に変化をもたらし得ない (すなわち uninformative である) 点で不自然となるはずのトートロジー文が、発話文として容認される事実の説明を与える。本研究は、文脈の柔軟性を考慮しつつ「X₁ は X₂ だ」の持つ意味構造から分析を試みる点において、意味論・語用論双方の貢献を採用する立場に位置付けられる。

2 観察と問い

Stalnaker (1978) によると、主張文 (assertions) による共通基盤 (Common Ground, 以下 “CG”) の適切な更新 (update) には以下の制約が課せられる。

- (1) An assertion of a proposition ϕ is felicitous with respect to an *initial* (input) CG K only if:
 - a. it is non-contradictory: $K \cap \phi \neq \emptyset$ (i.e., $\exists w. K(w) \& \phi(w)$)
 - b. it is non-redundant: $K \setminus \phi \neq \emptyset$ (i.e., $\exists w. K(w) \& \neg \phi(w)$), where K is a set of worlds.
- (2) John came in, and...
 - a. #he stayed outside. (contradictory)
 - b. #he entered. (redundant)

* 本研究は JSPS 科研費 JP21K13000 の助成を受けたものである。

[†] 津田塾大学, a21219oh@gm.tsuda.ac.jp

[‡] 津田塾大学, shun.ihara@tsuda.ac.jp

^{*1} 意味論的立場については Wierzbicka (1987), 語用論的立場については Levinson (1983), Ward and Hirschberg (1991), Snider (2015), cf. 酒井 (2012)、その両方を採用する立場については Fraser (1988), Bulhof and Gimbel (2004) などを参照。

「 X_1 は X_2 だ」文は、その文形式上、上記 (1b) の制約を常に違反する（すなわち、「既知の X_1 について X_2 の属性を持つ」という意味を持つことから、常に $K \setminus \phi = \emptyset$ となる点で redundant）が、その一方で、特定の含みを表出する場合は容認される。本研究で扱うのは、以下のように「 X_1 は X_2 だ」が X_1 に対する話し手の評価的含み (evaluative implicature) を表出するケースである (cf. 酒井 2012)。*2

- (3) (文脈：野球選手の 大谷は最近の試合では調子が悪かったが、今日の試合でここぞという場面でホームランを打った。)
 (やっぱり) 大谷は大谷だ。↪「大谷は結局活躍する」「ホームランを打ってこそ大谷だ」, etc.
 [肯定的評価 (positive evaluation)]
- (4) (文脈：普段勉強しないのび太が珍しく勉強をしているが、すぐにやめて昼寝してしまった。)
 (やっぱり) のび太はのび太だ。↪「のび太は結局は怠け者だ」, 「のび太には集中力なんてない」, etc.
 [否定的評価 (negative evaluation)]

Stalnaker の制約に基づくと、トートロジーはその意味的冗長性により共通基盤の適切な更新ができず、その点で (2b) と同様に容認されないはずであるが、実際には (3),(4) を含む様々な文脈において自然に発話される。上記の意味の表出を説明するにあたり、最も素朴な考えが会話の含意 (conversational implicatures, Grice 1975) を用いた語用論的分析である。しかしながら、上の評価的含みが会話の含意により生じるものであると仮定しても、(1) の制約が存在するにもかかわらず文が自然な発話として容認される事実は説明されない。*3 また、「 X_1 は X_2 だ」のような特定の構文から、なぜ (またどのように) 特定の意味が生じるのかという根源的な問いに対して、これまでのところ形式的分析は与えられていない。*4

本研究では、「 X_1 は X_2 だ」文は「 X_1 は X_2 で記述される属性を持つ」という恒真的意味に加えて、(3), (4) のような評価的含みを前提 (presuppositions) として表出することで冗長性が解消されるという方略を採用する。また、その前提は意味論的前提 (semantic presuppositions) であり、文の意味構造から義務的に生じるものであると主張する。個別のトートロジー構文における言語的要素と構造に着目することにより、トートロジーの表出する意味の言語間差異や普遍性の検討可能性を提示する。

3 提案と分析

本研究では、「 X_1 は X_2 だ」文はいわゆる譲歩的条件文 (concessive conditionals) の潜在的な意味構造を持つと主張する。具体的には、評価的含みを持つ「 X_1 は X_2 だ」は、非顕在的に *even if* 節を持ち、*even* の持つ尺度前提 (scalar presupposition) として評価的意味を表出することを提案する。

- (5) [[X -wa X -da_{evaluative}]] ↪ [[Even if ϕ , X is X]]
 e.g. [[Otani-wa Otani-da_{evaluative}]] ↪ [[Even if ϕ , Otani is Otani]],
 where $\phi = [Otani \text{ does not play well}], [Otani's \text{ batting average is low this season}]$, etc.

3.1 主題と *even if*

まず、Hara (2014) (cf. Haiman 1978, Ebert et al. 2008) に従い、日本語におけるトピック文 (topic sentences) は潜在的に条件文の意味構造を持つと仮定する。*5 「 X_1 は X_2 だ」文をトピック文であるとする Okamoto (1993) に従い、本研究においてもこの構造を仮定する。

*2 「 X_1 は X_2 だ」には、例えば「他人は他人 (君は君だ)」のように、評価的意味ではなく対比的な意味を表出する場合が存在する (坂原 2002)。この事実についての分析は後述する。

*3 また、Grice の理論をはじめとする語用論的知識は基本的には普遍的なものであるため、言語間のトートロジーの解釈や可能な構文の差異を捉えることは難しい (cf. Li 2004)。その他、トートロジーの語用論的分析 (e.g., Ward and Hirschberg 1991) の問題点については酒井 (2012) を参照。

*4 この問題意識については、酒井 (2012) における「無意味であるはずの文が実際の言語使用において意味を持つのはなぜか」という疑問と問いを共有している。酒井をはじめとする言語哲学的分析と本稿の形式意味論的分析の比較や親和性の検討については今後の課題とする。

*5 Hara (2014: 522-523) は、日本語の主題の「は」が英語の条件節と同様に文脈のシフト (context-shifting) が可能であることに加えて「だけは」疑問文の不自然性を根拠として、主題の「は」と条件文の意味構造の同一性を主張している。

(6) 犬はかかえなければならぬ。≈ *If there is a dog_i, you must carry it_i.*

次に、本研究では *even if* の意味論として Guerzoni & Lim (2007) の分析を採用する。まず、*even* の基本的意味については (7) の通りである (Horn 1969, Karttunen and Peters 1979)。Even は尺度 (scalarity) と累加 (additivity a.k.a. existential) の前提を導入しつつ、命題の意味をそのまま返す。^{*6}

(7) $\llbracket \text{even} \rrbracket (C)(p)(w)$ is defined iff:

- a. $\exists q \in C.[q \neq p \wedge q(w) = 1]$ (i.e., there is a proposition q s.t. $q \neq p$ and $q = 1$) **Additivity**
 b. $\forall q \in C.[q \neq p \rightarrow p \prec_{\text{likely}} q]$ (i.e., p is least likely among a set of alternatives C .) **Scalarity**
 if defined, $\llbracket \text{even} \rrbracket (C)(p)(w) = p(w)$ **Assertion**

Guerzoni & Lim は、*even if* 条件文において後件節 (consequent/main clauses) が含意されるいわゆる *introduced-if* 読み (Bennet 1982) について、*even* の焦点 (focus) として covert な肯定演算子 (affirmative operators AFF, (9)) を仮定し、(8) のような LF を仮定している。^{*7}

(8) *Even if the bridge were standing, I wouldn't cross.*

LF (simplified): Even [if [_F AFF] the bridge were standing, I wouldn't cross].

(9) Affirmative operator:

$\llbracket \text{AFF} \rrbracket^o = \lambda t.t / \llbracket \text{AFF} \rrbracket^f = \{\lambda t.t, \lambda t.t = 0\}$ ($\llbracket \cdot \rrbracket^o$: ordinary value / $\llbracket \cdot \rrbracket^f$: focus value)

上記に基づくと、*even if* 条件文 (8) は以下のように解釈される。このとき、累加の前提 (10b) と Assertion (10d) の意味の組み合わせにより、代替集合 C の二つの命題における前件の可能性が網羅され、ここから *even if* 条件文の後件が含意される (: (10e))。

- (10) a. $C = \left\{ \begin{array}{l} \llbracket \text{If the bridge were standing I wouldn't cross} \rrbracket, \\ \llbracket \text{If the bridge were not standing I wouldn't cross} \rrbracket \end{array} \right\}$ **by AFF**
 b. $\exists q \in C.[q \neq \llbracket \text{If the bridge were standing I wouldn't cross} \rrbracket \wedge q(w) = 1]$ **Additivity**
 c. $\forall q \in C.[q \neq \llbracket \text{If the bridge were standing I wouldn't cross} \rrbracket$
 $\rightarrow \llbracket \text{If the bridge were standing I wouldn't cross} \rrbracket \prec_{\text{likely}} q]$ **Scalarity**
 d. $\llbracket \llbracket \text{If the bridge were standing I wouldn't cross} \rrbracket (w) = 1$ **Assertion**
 e. **Additivity**_(10b) + **Assertion**_(10d): $\llbracket \llbracket \text{I wouldn't cross} \rrbracket (w) = 1$ **Consequent-entailment**

(10c) の **Scalarity** より、「話し手が橋を渡らない」のは、「橋がかかっている場合」と「橋がかかっている場合」を比較して、「橋がかかっている場合」の方が可能性が低いことが前提となる (言い換えると、「橋がかかっている場合の方が、かかっている場合よりも、橋を渡らない可能性が高い」ことになる)。さらに、(10b) の **Additivity** と (10d) の **Assertion** より、 C における命題は全て真となることから後件の「話し手が橋を渡らない」が含意され、ここから「橋がかかっている場合でもかかっている場合でも、(橋がかかっている場合については可能性は低いものの、) 話し手は橋を渡らないだろう」という譲歩的な意味が導出される。

^{*6} *Even* の scalarity として likelihood スケールを仮定する妥当性については議論の余地がある。詳細については Rullmann (2007) 参照。

^{*7} Bennet (1982) は *even if* 条件文には *introduced-if* と *standing-if* の解釈があることが指摘している。

- (i) a. *Even if the bridge were standing I wouldn't cross.* $\Rightarrow_{\text{emails}}$ *I wouldn't cross* **Introduced-if**
 b. *Even if John drank [one ounce]_F of whiskey she would fire him.* $\nRightarrow_{\text{emails}}$ *she would fire him* **Standing-if**

前者は後件 (= *I wouldn't cross*) を含意するのに対して、後者は後件 (= *she would fire him*) を含意しないという違いがある。本研究で取り扱う「 X_1 は X_2 だ」文がなぜ *standing-if* ではなく *introduced-if* のみの解釈に強制されるのかについては、検討が必要である。

3.2 「X₁ は X₂ だ」の意味導出

先に述べた通り、本研究では「X₁ は X₂ だ」文をトピック文であるとみなし、条件文の構造を仮定する。その上で、評価の意味を持つ「X₁ は X₂ だ」文における条件節は非顕在的な *even* を持つことを主張する。^{*8}

まず、本研究では、「X₁ は X₂ だ」における *even* と条件節を除く意味については、*uninformative* な（すなわち、それ自体に *informativity* はない）命題として扱う。「X₁ は X₂ だ」をいわゆる措定文 (*predicational sentences*) とみなし、郡司 (2015) に従い、「大谷」などの固有名は一般化量子子として、コピュラ「だ」は PTQ (Montague 1974) における *be* として扱う。^{*9}

- (11) a. $[[\text{Otani}]] = \lambda P_{\langle e,t \rangle}. P(\mathbf{o})$
 b. $[[\text{da}]] = \lambda \mathbb{P}_{\langle e,t \rangle}. \lambda x_e. \mathbb{P}(\lambda y_e. [x = y])$
 c. $[[\text{Otani-da}]] = [[\text{da}]]([[\text{Otani}]])$
 $= [\lambda \mathbb{P}. \lambda x. \mathbb{P}(\lambda y. [x = y])]([\lambda P. P(\mathbf{o})])$
 $= \lambda x. [[\lambda P. P(\mathbf{o})](\lambda y. [x = y])]$
 $= \lambda x. [\lambda y. [x = y](\mathbf{o})]$
 $= \lambda x. [x = \mathbf{o}]$
 d. $[[\text{Otani-wa Otani-da}]] = [[\text{Otani}]]([[\text{Otani-da}]])$
 $= [\lambda P. P(\mathbf{o})](\lambda x. [x = \mathbf{o}])$
 $= \lambda x. [x = \mathbf{o}](\mathbf{o})$
 $= [\mathbf{o} = \mathbf{o}] \text{ (uninformative)}$

次に、前節における *even* の意味 (= (7)) と、主題の意味構造 (= (6)) を反映させると、「X₁ は X₂ だ」は以下 (12) のように解釈されることになる。ただし、 α_c は文脈 *c* における共通基盤から与えられる命題 (*contextual anaphors*) であり、例えば (3) の文脈では「大谷は調子が悪い」という既知の命題として解釈される。^{*10}

- (12) 大谷は大谷だ。 (= (3))
 a. LF: Even [[if _[F AFF] α_c], 大谷は大谷だ (= [[(11d)])]]
 b. $\alpha_c \rightsquigarrow \text{Otani does not play well}$
 c. $C = \left\{ \begin{array}{l} [\text{If Otani does not play well, Otani is Otani }], \\ [\text{If Otani plays well, Otani is Otani }] \end{array} \right\}$ by AFF

^{*8} 通言語的に、譲歩的な読みが強制される場合において covert な *even* が仮定される分析は珍しくない（現代中国語における *zhiyao* 条件文については Wimmer (2022)、英語における *just* の最小十分読み (*minimal sufficiency readings*) については Panizza and Sudo (2020)）。ただし、いつ・どのような環境において covert *even* の挿入が許されるのかは現時点では明らかではなく (cf. Panizza and Sudo 2020)、制約が存在しない点で問題が残る。管見の限り、covert *even* についての議論は *covert only* に比べると少なく、より多くの経験的事実の観察が必要であると考えられる。

^{*9} 「X₁ は X₂ だ」の否定は以下のように不自然であるが、これは矛盾によるものである。直感的に言うと、個体 X について、X は X そのものである（すなわち、X は X 自身の属性を持つ）はずだが、X は X の属性を持たないと言っていることになる。

- (i) a. #大谷は大谷ではない。
 b. $[[\text{Otani-wa Otani-dewa nai}]] = [[\text{nai-}]]([[\text{Otani-wa Otani-da}]])$
 $= \neg([\mathbf{o} = \mathbf{o}])$
 $= [\mathbf{o} \neq \mathbf{o}] \text{ (contradiction)}$

しかしながら、「X₁ は X₂ だ」における X₁ もしくは X₂ のいずれかについて X の解釈を制限するような言語表現を付加した場合、矛盾は回避される (cf. 酒井 2012)。例えば、「今日の大谷」「いつもの大谷」「二刀流ではない大谷」など、「大谷」に何らかの属性や特定性を持たせた場合は矛盾は回避され、結果自然な文として容認される。

- (ii) a. { 今日の／二刀流ではない／ etc. } 大谷は大谷ではない。
 b. 大谷は { いつもの／日本にいたときの／ etc. } 大谷ではない。
 c. $[P(\mathbf{o}) \neq \mathbf{o}]$, where P_{et} = **today's, non-two-way-player, usual, in-Japan, etc.**

^{*10} (4) のような否定的評価の場合、与えられる α_c は肯定的評価を持つ命題に反転する。例えば、(4) における α_c は「のび太は（珍しく）勉強をしている」として解釈される。

- d. $\exists q \in C. [q \neq [\text{If Otani does not play well}] \wedge q(w) = 1]$ **Additivity**
- e. $\forall q \in C. [q \neq [\text{If Otani does not play well}] \rightarrow [\text{If Otani does not play well}] \prec_{\text{likely}} q]$ **Scalarity**
- f. $\llbracket [\text{If Otani does not play well, Otani is Otani}] \rrbracket(w) = 1$ **Assertion**
- g. **Additivity**_(12d) + **Assertion**_(12f): $\llbracket [\text{Otani is Otani}] \rrbracket(w) = \llbracket (11d) \rrbracket = 1$ **Consequent-entailment**

(12e) より、「大谷が大谷である」のは、「大谷が調子が良い（もしくは活躍する）場合」よりも「大谷が調子が悪い（もしくは活躍しない）場合」の方が **unlikely** となる。すなわち、「大谷は活躍した場合の方が活躍しなかった場合よりも「大谷の属性を持つ」と言いやすいことになる。^{*11} より直感的には、「大谷は活躍した時の方がより大谷らしい」ということになり、ここから、話し手の大谷に対する評価の意味（e.g., 「大谷は結局活躍する」「ホームランを打ってこそ大谷だ」）が得られる。また、(12g) より、代替集合 C における命題は全て真となるため、「(調子が良い場合でも悪い場合でも、) 大谷は大谷である」が含意される。

本分析では「 X_1 は X_2 だ」文は意味的に冗長ではなく、(12b,c) の **Additivity, Scalarity** の意味貢献により、共通基盤を **non-redundant** に更新可能となるため、**Stalnaker** の冗長性に関する制約 (: (1b)) に違反しない。^{*12} ここから、「 X_1 は X_2 だ」文が（命題の意味として **redundancy** を帯びるにも関わらず）発話として容認される事実が説明される。

4 経験的サポートとさらなるデータ

4.1 世界知識と尺度性

「 X_1 は X_2 だ」文が潜在的に *even if* 条件文の意味構造を持ち、尺度前提を持つことは経験的に支持される。第一に、上記の分析からは、尺度前提 (**Scalarity**, (7b)) を満たしにくい場合、「 X_1 は X_2 だ」文は評価の意味を伴うトートロジーとして不自然となることが予測される。例えば、「全員」のような量化詞句は、それ自体では世界知識として「全員」に関する属性（すなわち、「全員らしさ」）が想起されにくく、「 p の場合よりも $\neg p$ の場合の方がより全員の属性を満たしやすい」という命題間の **likelihood** の比較が困難である。ゆえに、この種の表現は（例えば「全員」が話し手の知っている特定の個体の集合を指示する場合など、特定の文脈の想定無しには）「 X_1 は X_2 だ」文における X としては不自然となることが予測される。^{*13} 以下 (13a-b) のように、この予測は経験的に裏付けられる：

- (13) a. ??全員は全員だ。
b. ?? (角度について) 180度は180度だ。

次に、「 X_1 は X_2 だ」文に明示的に *even if* 節を付加し、代替集合内の命題間の **likelihood** の比較が世界知識とそぐわないように解釈を強制した場合、尺度前提が満たされなくなるため、文として不自然になることが予測される。例えば、(3) に「(大谷の) 調子がよかったとしても」という譲歩的条件節を明示的に付加すると、(3) の意味計算において利用される命題 ((12) における α に相当する命題) が「大谷は調子が良い」となり、(12e) の **likelihood** スケールが反転する。その結果、「大谷は活躍しない場合の方がより大谷らしい」

^{*11} 述部「大谷だ」が「大谷」の持つ属性を記述することについては、その主語として「大谷」が指示する個体（すなわち大谷選手）以外の個体が許容されることから裏付けられる：

- (i) このチームにおいて、太郎は大谷だ。
(ii) (文脈：山田の活躍ぶりを見て、) 今日の山田は大谷だ。

^{*12} ただし、この分析を支持するためには、(1) における ϕ を命題の意味 (**propositional/at-issue/truth-conditional meanings**) 以外の様々な意味 (前提や慣習的含意などの非命題的意味) を含む要素として定義する必要がある。前提が共通基盤を更新可能か否かについては、前提の分類や文脈更新の定義などを含めた様々な考え方が存在するため、ここでは議論を避ける。

^{*13} 「全員だ」のような量化詞句にそもそも属性は仮定できないとみなす方向性を採ることも可能であるが、その場合、属性を持ちうる（あるいは持ち得ない）名詞句とはどのようなものかについて論じる必要性が生じるため、本研究では「属性の想起されにくさ」という世界知識的・文脈的要因から当該の現象を分析する。ある名詞句における属性が想起しやすいか否かは、名詞句が潜在的に持つスケール性に関与している可能性が高い (cf. Morzycki 2009)。

という尺度前提 (= (14b)) が表出されることになるが、これは「大谷という個体は活躍する（基本的に調子が良い）ものである」という世界知識とそぐわず、不自然となる。^{*14} この予測は経験的に正しく導かれる：

- (14) a. ✓ 調子が悪かったとしても、大谷は大谷だ。
 [If Otani does not play well, Otani is Otani] \prec_{likely} [If Otani plays well, Otani is Otani]
 (compatible with world knowledge)
- b. # 調子がよかったとしても、大谷は大谷だ。
 [If Otani plays well, Otani is Otani] \prec_{likely} [If Otani does not play well, Otani is Otani]
 (incompatible with world knowledge)

4.2 差異化トートロジーと対照主題

「 X_1 は X_2 だ」には、以下のように、評価的意味ではなく対比的な意味を表出する場合が存在し、坂原 (2002) はこれを差異化トートロジーと呼んでいる。

- (15) A: どうして私は勉強が苦手なんだろう。
 B: (他人は他人、) 君は君だ。

本稿の目的と紙幅の都合上、ここで分析の詳細は避けるが、本研究では上記のようなタイプのトートロジーは評価的意味を持つ場合とは異なる仕組みで意味が導出されることを主張する。具体的には、差異化トートロジーの「は」はいわゆる対照主題 (contrastive topics) であり、代替集合内の命題のうち、発話文「[CT 君は] 君だ」の発話命題 (i.e., $p = \text{you are you}$) よりも論理的に強い命題 (i.e., $\lambda x : x \neq \text{ADDRESSEE.}[x \text{ is you}]$) について、不知の推論 (ignorance inferences)、すなわち「君以外の誰かについては（君の属性を持つかは）知らない」のような意味を表出することで、発話命題を強調し、冗長的な共通基盤の更新を回避していると考えられる。^{*15} 差異化型の「 X_1 は X_2 だ」における「は」が、本稿で取り上げた評価的意味を持つタイプの「は」と異なることは、フォーカスプロソディーの可否からも経験的に確かめられる (cf. Hara 2006, Tomioka 2009)。^{*16} 以下のように、評価的解釈に強制された「 X_1 は X_2 だ」文にフォーカスプロソディーを与えるのは不自然である一方で、差異化型の「 X_1 は X_2 だ」についてはこのプロソディーが容認される。

- (16) a. 文脈：大谷は最近の試合では調子が悪かったが、今日ここぞという場面でホームランを打った。
 (やっぱり) ??{ 大谷は / 大谷は } 大谷だ。 [評価型]
- b. A: どうして私は勉強が苦手なんだろう。
 B: (他人は他人、) { 君は / 君は } 君だ。 [差異化型]
 (太字体+下線はフォーカスプロソディーの高ピッチを示す)

5 結論

本研究は、トートロジー文を構成する言語的要素の意味と構造に着目することで、なぜ“ X_1 is X_2 ”で表されるトートロジー文の解釈や構文が言語毎に異なるのか (cf. Li 2004) という問いに対して、一つの説明可能性を与える。すなわち、日本語の場合、「は」から生じる意味がトートロジー文の可能な解釈に二種類のバリエーション (評価型あるいは差異化型) を与えていると言える。さらに、本稿で扱った現象と分析は、いわゆる *discourse concessivity* (Baranzini and Mari 2019) と呼ばれる、文が特定の文脈において *even* などの要素がないにもかかわらず譲歩的解釈を得る現象の一パターンに分類される点で、談話における譲歩性表出の仕組みの解明に貢献する。

^{*14} ある名詞 (句) X のプロトタイプ (すなわち、どのようなものが X らしいと言えるか) に関しては古くから議論が続いている (e.g., Kamp and Partee 1973)。

^{*15} 対照主題の「は」の形式意味論的分析は諸説ある (e.g., Hara 2006, Sawada 2007, Tomioka 2009, Oshima 2021)。先行研究のうち、どの分析が差異化トートロジーの解釈を正しく予測可能か検討するのは将来の課題とする。

^{*16} 日本語の対照主題のプロソディーには、「は」が付加する句に高いピッチが来るパターンと、「は」そのものに高いピッチが来るパターンの二種類が存在する。また、日本語における対照主題は英語やドイツ語のように特有のプロソディーがあるわけではなく、基本的にはフォーカスと同じパターンのプロソディーが与えられ (日本語のフォーカスプロソディーについては Ishihara (2003) 参照)、対照主題の二種類のピッチパターンは「だけ」などの焦点助詞も特徴として共有している。

本研究に残された課題として、トートロジーではないような主題文に対する予測の可否が挙げられる。例えば、「大谷は野球選手だ」のような文について、*even if*の構造を仮定した分析が妥当か否かは、言語事実の整理を含めて検討の余地を残す。また、「 X_1 は X_2 だ」における X が節である場合 (e.g., 「??今のままではいけないということは、今のままではいけないということだ」) や、「は」以外の助詞が使用される場合 (e.g., 「大谷{が/も}大谷だ」, cf. Okamoto 1993) の分析についても、重要な課題となる。

参考文献

- [1] Baranzini, L. and A. Mari. 2019. From epistemic modality to concessivity: Alternatives and pragmatic reasoning per absurdum. *Journal of Pragmatics* 142. 116–138.
- [2] Bennet, J. 1982. Even If. *Linguistics and Philosophy* 5, 403–418. 5.
- [3] Bulhof, J. and S. Gimbel 2004. A tautology is a tautology (or is it?). *Journal of Pragmatics* 36(5), 1003–1005.
- [4] Ebert, C., Cornelia E. and S. Hinterwimmer. 2008. Topics as speech acts: An analysis of conditionals. *Proceedings of WCCFL27*, 132–140.
- [5] Fraser, B. 1988. Motor oil is motor oil: An account of English nominal tautologies. *Journal of Pragmatics* 12(2), 215–220.
- [6] Grice, P. 1975. Logic and Conversation, *Speech Acts, Syntax and Semantics* 3, 41–58, Academic Press, New York.
- [7] Guerzoni, E. and D. Lim. 2007. Even if, factivity and focus. *Proceedings of Sinn und Bedeutung* 11, 276–290.
- [8] 郡司隆男. 2015. 日本語のコピュラ文の形式意味論的分析. *Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin* 18, 13–24.
- [9] Haiman, J. 1978. Conditionals are topics. *Language* 54. 565–589.
- [10] Hara, Y. 2006. *Grammar of Knowledge Representation: Japanese Discourse Items at Interfaces*. Doctoral Dissertation, University of Delaware.
- [11] Hara, Y. 2014. Topics are conditionals: A case study from exhaustification over questions. *Proceedings of PACLIC 2014*. 522–531.
- [12] Horn, L. 1969. A presuppositional analysis of only and even, *Papers from the 5th Regional Meeting*, 98–107. Chicago Linguistic Society.
- [13] Ishihara, S. 2003. *Intonation and Interface Conditions*, Doctoral Dissertation, MIT.
- [14] Kamp, H. and B. Partee. 1995. Prototype theory and compositionality. *Cognition* 57(2): 121–191.
- [15] Karttunen, L. and S. Peters. 1979. Conventional Implicature, *Presupposition, Syntax and Semantics* 11, Academic Press, New York.
- [16] Levinson, S. 1983. *Pragmatics*, Cambridge University Press, Cambridge.
- [17] Li, X. 2004. A contrastive study of tautology between Chinese and English. *Intercultural Communication Studies XIII*, 171–180.
- [18] Morzycki, M. Degree modification of gradable nouns: size adjectives and adnominal degree morphemes. *Natural Language Semantics* 17, 175–203.
- [19] Montague, R. 1974. The Proper Treatment of Quantification in Ordinary English. *Formal Philosophy*, 247–270. Yale University Press.
- [20] Okamoto, S. 1993. Nominal repetitive constructions in Japanese: The ‘tautology’ controversy revisited. *Journal of Pragmatics* 20. 433–466.
- [21] Oshima, D. Y. 2021. When (not) to use the Japanese particle wa: Groundhood, contrastive topics, and grammatical functions, *Language: A journal of the Linguistic Society of America* 97(4), 320–340.
- [22] Panizza, D. and Sudo, Y. 2020. Minimal sufficiency with covert even. *Glossa: a journal of general linguistics* 5(1).
- [23] Rullman, H. 2007. What does even even mean? Handout of a talk at the Linguistic Colloquium, University of Calgary.
- [24] 酒井智宏. 2012. 『トートロジーの意味を構築する: 「意味」のない日常言語の意味論』. くろしお出版.
- [25] 坂原茂. 2002. トートロジーとカテゴリ化のダイナミズム. 『認知言語学 II : カテゴリ化』東京大学出版会.
- [26] Sawada, O. 2007. The Japanese contrastive wa: a mirror image of even. *Proceedings of the annual meeting of the Berkeley Linguistics Society* 33, 374–387.
- [27] Snider, T. 2015. Using tautologies and contradictions. *Proceedings of Sinn und Bedeutung* 19, 590–607.
- [28] Stalnaker, R. 1978. Assertion. *Syntax and Semantics* 9, 315–332.
- [29] Tomioka, S. 2009. Contrastive topics operate on speech acts. *Information structure: theoretical, typological and experimental perspectives*, 115–138. Oxford: Oxford University Press.
- [30] Ward, G. L. and J. Hirschberg. 1991. A pragmatic analysis of tautological utterances, *Journal of Pragmatics* 15(6), 507–520.
- [31] Wierzbicka, A. 1987. Boys will be boys : ‘Radical semantics’ vs. ‘Radical pragmatics,’ *Language* 63, 95–114.
- [32] Wimmer, A. 2022. *Zhi- $\{yao, you\}$ ‘only- $\{need, have\}$ ’*: on two conditional connectives in Mandarin. *Journal of East Asian Linguist* 31, 401–438.